人と、地域と、未来をつなげる教育マガジン

# tokiwa

vol.16
February 2011

特集

## TOKIWAでひろがる グローバル教育のネットワーク

## つなぐ・ひろがるTOKIWAの輪

キャンパスを出て、街の中へ、人の中へ。

## tokiwa CONTENTS


特集
1 TOKIWAでひろがる グローバル教育のネットワーク

7 つなぐ・ひろがるTOKIWAの輪
キャンパスを出て、街の中へ、人の中へ。

9 学びのTOPIC
各学校組織の最新動向をピックアップレポート

17 学生インタビュー「キャンパスから未来へ」
卒業する学生からのメッセージ


表紙イラストについて

**「地球をつなぐ人」**

今号の「tokiwa」では、「国際交流」の最新トピックスを特集しました。2010年はアジアを中心に世界情勢を揺るがすニュースが続きました。そんな中にあっても、学生同士、同じ研究を志す者同士で、互いの文化を理解しあい、同じ未来に向かって進んでいく取り組みが、常磐大学では日々生まれています。一つひとつは小さな芽吹きでも、継続したチャレンジによって大きな果実に成長することを目指して、常磐の国際交流はこれからも進化していきます。表紙のイラストには、人と人とのつながりが、新たな世界の形、地球の絆をつくっていくという願いを込めました。

illustrator　平野 こうじ

Japan University Accreditation Association
UNIVERSITY ACCREDITED 2010. 4〜2017. 3
常磐大学は平成21年度大学評価の結果、(財)大学基準協会の大学基準に適合していると認定されました。

Japan Association for College Accreditation
JACA Accredited College
ACCREDITED 2008
常磐短期大学は平成20年度(財)短期大学基準協会による第三者評価の結果、適格と認定されました。


TOKIWA
February 2011 / vol.16
発行日　2011年2月
発　行　学校法人常磐大学
編　集　広報課



〒310-8585 茨城県水戸市見和1丁目430-1
Tel.029-232-2511(代)
http://www.tokiwa.ac.jp/

# TOKIWAでひろがるグローバル教育のネットワーク

学校法人常磐大学では開学100周年を機に「世界的視野で考え、行動できる人間を育てる。」という新たな教育の基本理念を掲げ、国際教育に一層力を入れています。世界の大学等と連携を結び、国際的な舞台で活躍できる人材の育成を目指して様々な制度や環境を整備。グローバルにひろがるTOKIWAの取り組みについて、最新の動向をお伝えします。

ネイティブの学生と
英語で話せるから、
会話力もどんどんアップ！

## TOKIWA

TOKIWAのキャンパスで語学留学。高校も大学も「EC 活動」enjoy 中！

高校 H.S.

P.4

海外からTOKIWA に留学中！たくさんのイベントを体験！

P.6

本当の家族のようなTOKIWA生と留学生。国際交流会館での共同生活に密着！

P.3

チューターがつなぐ、国境を越えたフレンドシップ

P.3

## Canada

カナダのホームステイで生きた英語を身に付ける！

高校 H.S.

P.5

ホームステイでの
3ヵ月間は毎日が刺激的。
ますます英語が
楽しくなりました。

## America（カリフォルニア大学アーバイン校）
## England（チチェスターカレッジ）
## China（北京第二外国語学院）

多様な研修先で異文化に触れるチャンス

P.6

## America

ノースリッジで学ぶ交換留学生から、ホットな現地レポート

P.5

クラスメイトは
タイ人、中国人、韓国人…。
留学後も皆と
仲良くしていきたい。

## TOPICS グローバルな取り組みの最新ニュースをお伝えします。

**Korea ／ Taiwan**

### 韓国・台湾の大学と連携協力協定を締結

常磐大学では、2010年、国立韓国伝統文化学校、韓国・大邱サイバー大学、台湾・国立台北教育大学との間で連携協力協定を締結。今後、教員や学生の相互訪問や共同研究プロジェクトが発足する予定になっています。

**Asia**

### 国際被害者学研究所がJICA受託事業

アジア地域のホスト校として「アジア地域大学院コース―被害者学および被害者援助論」を毎年8月に実施し、2010年には10回目を数えました。また、JICAの受託事業として、発展途上国の被害者施策を担う専門家の育成をサポートしました。

**Japan（常磐大学）**

### インターネットを使ったTOEFL-iBTを実施

常磐大学では、アメリカやカナダの大学へ留学・研究をするために必要な英語能力をインターネットを使って判定するTOEFL-iBTを、2010年10月に茨城県内で初めて実施しました。また、TOEFL-iBT受験に向けた準備コースを設けています。

## 連携協力協定締結校・研修実施校一覧

**アメリカ**
① カリフォルニア州立大学ノースリッジ校
② カリフォルニア州立大学フレズノ校
③ カリフォルニア大学アーバイン校

**カナダ** 高校 H.S.
④ アルバータ州ハリーエインリー高校

**イギリス**
⑤ チチェスターカレッジ

**中国**
⑥ 北京第二外国語学院

**台湾**
⑦ 国立台北教育大学

**韓国**
⑧ 国立韓国伝統文化学校
⑨ 大邱サイバー大学

**タイ**
⑩ カレッジ・オブ・アジアン・スコラーズ／フォン・コマーシャル・アンド・テクニカル・カレッジ

# TOKIWAのキャンパスは、身近な国際交流のステージ。

キャンパスでは、アメリカからの交換留学生やアジアの国々からの留学生が授業やサークル活動に参加し、様々な場面で活躍。日々の異文化交流によって、学生一人ひとりのグローバルな視野が養われています。学生が自主的に取り組んでいるEC活動やチューターなど、積極的に国際交流を深めている学生たちの姿をレポートします。

## チューターと留学生が結んだ熱い友情

**まず友達になって、そこからお互いに言葉や文化を教え合う楽しさ**

チューター活動では、学生が留学生の生活をサポートしたり相談に乗っています。中国からの国際学部経営学科２年の夏春嵐さんと、チューターを務める人間科学部コミュニケーション学科３年の今野沙織さんも仲良しです。

**夏**　チューターの皆は、常磐に来て最初にできた友達です。初めは少し緊張しましたが、皆が明るく声をかけてくれるので、とても安心しました。

**今野**　買い物のことや食べ物のことなど、身近な話をしています。言葉が多少わからなくても、お互いを思いやる心のふれあいができるところがチューター活動の最大の魅力です。

**夏**　今野さんは私が日本について質問すると、どんなことでも答えてくれます。例えば、私は日本人が音を立ててラーメンを食べるのにビックリしましたが、文化の違いもわかりやすく説明してくれます。

**今野**　私も中国語検定に備えて文法を教えてもらいました。いつか、一緒に中国に行って観光する約束をしているので、とても楽しみです。

2人が会うと、笑顔で会話が弾みます。（左から今野さん、夏さん）

留学生1人に対し、3〜4人のチューターがいます。

## 国際交流会館の生活で育まれる絆

**国は違っても家族のよう。一緒に食卓を囲む時間が一日で一番の楽しみ**

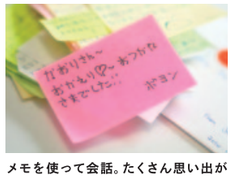
国際交流会館では様々な国の留学生がルームシェアをしています。台湾からの人間科学研究科博士課程（後期）1年 邱君妮さん、韓国からのコミュニティ振興学研究科修士課程研究生禹寶永さん、人間科学研究科修士課程２年後藤かおりさんの共同生活をご紹介します。

**邱**　かおりさんが携帯電話の買い方やごみの出し方などをアドバイスしてくれるので、生活上の不安はありません。研究に関しても、日本の論文の書き方について教えてくれました。一番楽しかったのは禹さんに韓国料理を作ってもらったこと。一緒に食事をするのが何よりも楽しみです。

**禹**　私は日本の博物館と文化を学びたくて日本に来ました。まだ日本語を勉強中で、教科書と会話表現の微妙な違いにとまどいますが、2人の会話を聞いていると理解が深まります。3人とも国は違いますが、同じアジア人なので家族のような感じがします。

**後藤**　夜遅くなって2人に会えないときは、ドアにメモを貼っています。メモの内容は「お疲れさま」とか「お菓子どうぞ」とか。日常の些細なことですが、本当の家族のような心のつながりができました。

おみやげやお菓子はみんなで分け合います。（左から邱さん、禹さん、後藤さん）




メモを使って会話。たくさん思い出ができました。

## 高校、大学で盛んな「EC活動」は、キャンパス内の語学留学

**留学生とのコミュニケーションが刺激になって、語学力もアップ**

秋セメスター期間中、常磐大学ではアメリカからの交換留学生約10名による英会話活動"EC"を行っています。ECは、English Connectionsの略で、留学生1名に対して日本人3〜4名がつき、少人数で生きた英会話を体験しています。会話中は日本語禁止、辞書も使わないというルールがあり、参加学生は自分の会話力を実感、レベルアップのきっかけになっています。

また、常磐大学高等学校でも授業の中にEC活動を取り入れ、テキストだけでは習得できない会話力を鍛えています。EC活動には毎年100名以上が参加し、この経験を基盤に海外研修に行ったり、チューター活動を始める学生も数多くいます。

## EC活動に参加した学生・生徒の声

### 英語が話せない悔しさをバネに。

高校時代は英語が不得意で、成績もかなり下の方。そんな私が英米語学科に入ったのは、大学でいろいろな分野を勉強するよりは、一つの分野に集中したほうが長続きするのではと思ったからです。1年のときに初めて参加したEC活動では、留学生を前にまったく英語が話せず、悔しい思いをしました。

その後で海外研修に行ったらとても楽しくて、ぜったいもう一度行こう！と思い、交換留学生を目指して勉強を始めました。

EC活動では最初は「yes」や「I think so」ぐらいしか話せませんでしたが、だんだん慣れてきて1年が終わる頃には多少会話ができるようになりました。3年の秋に希望が叶って交換留学生として、5ヶ月間アメリカに滞在し、英語で勉強するという貴重な体験ができました。EC活動の良さは日本にいながらネイティブの人たちと英語を話す機会が持てるところ。続けていくと確実に会話力がアップしていることがわかります。

国際学部英米語学科４年
戸﨑 愛美

### 文法も留学生との会話を通して学習。

将来の可能性を模索する中で、英語に触れる経験を早めにしたいと思い、EC活動に参加しました。週1回、放課後に1時間半ぐらいのレッスンですが、映画や音楽、食べ物など、私たちにも親しみやすいテーマなので、楽しく会話できています。

最初は文法が苦手で不安もありましたが、留学生がジェスチャーやヒントでわかりやすく指導してくれるので、無理なく勉強できました。テキストで見ていた文法が、実際に留学生と話しているときに出てきたりすると、「こういうふうに使うんだ」と体験を通して学べます。最近は会話がずいぶん続くようになり、ますますEC活動の時間が楽しみになっています。

常磐大学高等学校
1年４組　石田 実奈子

### 異文化を知ることも面白さのひとつ。

日本だけでなく世界で活躍できるようなビジネスマンになりたいと思い、EC活動に参加しました。英語はまったく苦手だったのですが、留学生と話すようになって、大好きになりました。好きな俳優やスポーツ選手の話をよくしますが、食習慣など身近な文化で発見や驚きがあるのも面白さの一つです。

最初はまったく会話できませんでしたが、少しずつわかってきて、以前よりは話せるようになってきました。今では冗談を言って笑い合えるようにもなっています。

将来、カナダ留学もしてみたいです。留学生たちのように流暢に話せるよう頑張りたいと思います。

常磐大学高等学校
3年10組　鴨志田 浩

# 豊かな海外体験が、一人ひとりの世界を大きく広げます。

常磐大学・常磐短期大学、常磐大学高等学校には、海外協定校で語学や各国の文化を体験的に学べる多彩な留学・研修制度があります。この制度を利用して毎年多くの学生・生徒が海外に飛び出し、新たな自分の可能性を発見しています。それぞれが得た成果について語ってもらいました。

## 常磐交換留学制度

### ノースリッジで学ぶ交換留学生から、ホットな現地レポート

**語学能力や面接等により選抜された学生が、毎年カリフォルニア州立大学ノースリッジ校とフレズノ校に派遣されています。この制度では、常磐大学から派遣先大学の授業料や渡航費等の支援が受けられます。**

国際学部英米語学科　3年　豊田 友梨恵
（カリフォルニア州立大学ノースリッジ校に交換留学）

（写真左）

留学してから、Listening, Speaking, Writingの力がとても伸びたと思います。学校が始まった頃はなかなか発言できなかった私ですが、いまは頭の中で考えるよりも前に、どんどん英語が出てきます。Writingについては毎週泣きたくなるほどessayを書いたので、書き方もマスターし、考え方も論理的になりました。自分から話しかけよう、行動しようという積極的な姿勢も身に付きました。語学の面でも、性格の面でも大きく成長したと思います。

ルームメイトの中国人とは、文化の違いを恐れずに共同生活の改善点を伝え合い、今では親友です。タイ人、韓国人のクラスメイトも、一緒にいて気が楽な仲間たち。先日はみんなでDisneylandに行ったのですが、日本人同士で行くよりも倍以上楽しめたと思います。留学は勉強が全てではなく、むしろキャンパス外で学ぶことのほうが多いかもしれません。だから毎日が新鮮で、大切だと感じます。

## 短期語学留学

### 高校生もカナダで語学留学を体験！

**常磐大学高等学校では毎年秋に「カナダ短期語学留学プログラム」としてアルバータ州にあるハリーエインリー高校で3ヶ月の留学体験をサポートしています。**

携行品や注意事項などがまとめられたしおり。生徒たちはこれを参考に準備を整えます。

受入先の高校のアルバムには、常磐との交流の様子も収録されています。

### 自分から関わっていく勇気が自信に。

授業は全て英語でしたが、英語を第二言語とする人のための授業もあり、少しずつ理解できるようになりました。

一番印象に残ったことは、ホストファミリーのミーティングに参加させてもらったことです。迷いましたが、鈴木先生から励ましの言葉をいただき、「自分の語学力を試してみよう！」と勇気を出して出席させてもらいました。

帰国後の英語検定では成績が上がり、EC活動でも表彰を受けました。ますます英語が楽しくなりましたし、自信や積極性も身に付いたと思います。

常磐大学高等学校
2年3組　今橋 明香里

### 英語をツールに自分の世界を広げる。

留学でプラスになるのは、語学力だけではなく英語をツールにして自分の世界を広げる経験ができることです。生徒たちは帰国後もホストファミリーや友人とメールをしており、こうした人とのつながりも大きな財産です。

そして本校が留学生を受け入れたときには皆、ホストブラザー、ホストシスターとして留学生のお世話をしています。

留学から帰ってきた生徒は、一歩踏み出せば世界が広がること、行動すれば前に進めることを学び、自信と自主性が身に付いています。

常磐大学高等学校
英語担当　鈴木 レイ子



## 短期語学研修

### 多様な研修先で異文化に触れるチャンス

「短期語学研修」には、アメリカと中国とイギリスでの研修があります。アメリカではカリフォルニア大学アーバイン校で4週間の英語研修、中国では北京第二外国語学院で2週間の中国語および文化体験研修、イギリスではチチェスターカレッジで3週間の英語研修を行っています。旅行研修も組み込まれており、現地の文化に触れる体験学習のチャンスが広がります。研修はいずれも単位認定されます。

### アメリカ「海外研修A」

**カリフォルニア大学アーバイン校**
**［研修期間］2月上旬～3月上旬**

毎週月曜日の夕食後、ホストマザーと2人でテレビを見ていました。その番組を通して、お互いの意見をいい合ったり、そこから笑いが生まれたりして、本当に楽しかったです。

国際学部英米語学科　3年
越村 友紀
（写真 上列右から2人目）

アメリカで受けた授業はユニークなものばかりでした。Speakingの授業では、自分で発明品を考えて発表したり、みんなでオリジナルのコマーシャルを作ったり、歌を歌ったり。いままでやったことがないことができ本当に楽しかったです。

国際学部英米語学科　2年
藤田 昌宏
（写真 下列右端）

### 中国「海外研修B」

**北京第二外国語学院**
**［研修期間］2月中旬～3月上旬**

19日間で、日本では感じることができない様々なことを体験できました。特に、経済特区の上海で、茨城県上海事務所、日系工場を見学したことは、経営学を学ぶ私にとってとても大きな収穫でした。

国際学部経営学科 2年
坂本 涼香（写真左から3人目）

### イギリス「国際文化研修」

**チチェスターカレッジ**
**［研修期間］2月中旬～3月中旬**

単語とジェスチャーに頼るばかりの会話に悩んでいたら、クラスの先生から「良かったじゃない、その体験を通してあなたにしかできない発見をいくつもしたでしょ」と言われました。不安に負けず、積極的に英語を学び続けていきたいと思います。

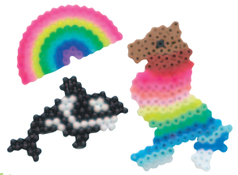
国際学部英米語学科 4年
志藤 聡美（写真上から2列目左から3人目）

### 留学生との交流イベントも盛りだくさん！思い出づくりや絆を深めるきっかけに！

常磐大学では国際交流語学学習センターを中心に、様々なイベントを企画し、留学生と学生が自然に交流できる機会を提供しています。チューターの学生と一緒に行くバス旅行を初め、バーベキュー大会、餃子パーティー、講義の一環として行われる神社仏閣めぐりなど、内容も楽しく多彩。また、留学生が英会話の授業アシスタントをするTA（ティーチングアシスタント）制度もあり、日本人学生と共に学ぶ機会も設定されています。

地域に根ざしたCVCの活動 ／ 大学発

# 世代をつなぐ、地域をつなぐ、ボランティアのネットワーク。

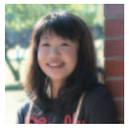


こども病院で子どもたちと一緒に作る作品

CVC（コミュニティ・ボランティア・サークル）は、常磐大学にコミュニティ振興学部が開設された2000年、当時の学生数名が自主的に創設したサークルです。以来、県立こども病院で病児と交流する定期活動を中心に、地元産業祭でのボランティアや社会福祉協議会主催講座のサポートなど、様々な活動に参加。部員の数も増加傾向で、現在では地域に根づいたサークルとして学外機関とのネットワークを広げています。

## 考えるより まず行動してみること。

こども病院でのボランティアは、療養中の子どもたちの遊び相手になって、一緒に楽しい時間を過ごす活動です。アイロンビーズやラミカといった、子どもの創造力を生かしたものづくり体験が中心です。身体に負担をかけないよう配慮しつつ、子どもの体調に合わせ、飽きないよう工夫することを心がけています。親御さんと一緒に遊ぶこともあります。現在は他に、里親さんのもとで生活している子どもたちへの学習ボランティアも行っています。帰るとき、玄関まで駆けてきて「また来てね！」と大きく手を振ってくれる姿を見るととても嬉しく感じます。子どもと接していく中で学んだことは、考えすぎず行動することが大事。そして、もし思い通りにいかないことがあっても、自分自身が変われば周りも変わるということです。将来は、児童相談所の児童福祉司を目指していますが、CVCでの経験を生かして笑顔を絶やさず自分から関係を作っていける福祉司になりたいです。



**コミュニティ振興学部**
**ヒューマンサービス学科 3年 平塚 布舞紀**

こども病院での活動

## ボランティア 受入先の病院から

常磐大学の学生さんは素直で熱心な方ばかりで、活動時間、手洗い、マスクにエプロンなどの基本から、看護師との綿密なやりとりまでしっかりしていて頭が下がります。夕方の病院内がさみしくなる時間帯に来てくれるので、子どもたちもお兄さん、お姉さんを家族のように心待ちにしています。10年続く中で、メンバーが替わっても引継ぎが非常にスムーズなので感心しています。ご家族からも「親しくしてもらって幸せです」という声が聞かれます。

**茨城県立こども病院 成育在宅支援室**
**西野 文子 様**

私はCVCを設立したメンバーの一人ですが、卒業後にソーシャルワーカーを2年経験し、その後、こども病院で仕事をすることになりました。学生の頃からやってきたボランティアは、現在も養護学校で続けており、当時知り合ったお母さんや子どもたちと会える大切な機会になっています。CVCの活動は私の人格形成の基盤になったもので、先輩と後輩のつながりはいまでも続いています。

**茨城県立こども病院 診療情報管理室**
**遠藤 春香 様**
**（コミュニティ振興学部**
**ヒューマンサービス学科2003年度卒業）**

## 人とつながっていくことが大切。

こども病院での活動を通して、学生たちは様々な経験を重ね、その中で得たものを後輩に引き渡し、また、後輩も新しい提案をしながら、時代にあったボランティアのあり方をつくり上げてきました。もともとCVCは、地域での活動をイメージしてつくられたものです。例えば手話や環境保護などの特定のボランティア活動にとどまるのではなく、さらに幅広い活動を体験し、それにより様々な活動をしている地域の人々と出会う。さらに、その活動結果を社会に発信する。その意味で“コミュニティ・ボランティア・センター”という名の意味する役割も果たせればと考えています。常磐大学が地域の大学としてニーズに応えていくためには、外の世界にアンテナを張り、積極的に人とつながっていくことが大切です。活動成果から、大学がさらに何に応えられるかにつなげていく。そこには、学生だからこそできることもあります。そういう意識を持って、どんどん外に出て行ってほしいと思います。

**コミュニティ振興学部**
**ヒューマンサービス学科 教授**
**池田 幸也（CVC顧問）**



地域活性化を考える学生からの提言 ／ 大学発

# 教室からは見えない課題に、学生らしい行動力でアプローチ。

学生の目線で水戸市民へメッセージを発信

2005年、常磐大学と水戸市は行政課題の解決に取り組む「連携協力に関する協定」を締結しました。また、2006年、日本公共政策学会が主催した「学生政策コンペ」では、常磐大学コミュニティ振興学部の林寛一先生のゼミ生たちが「納豆によるまちづくり」を提案し、見事優勝を果たしました。これらがきっかけとなり、2008年から市の広報紙「広報みと」紙上で学生による政策提案「僕たちはこう考える」という連載記事がスタート。ゼミ生たちが地域を探索し、様々な交流や見聞の中から気づき考えたことを発信する「学官連携企画」が続いています。

## 指導にあたった教員から

今日の大学教育は、問題解決型の学びが重要視されています。また、「地域貢献」が課題として挙げられており、「広報みと」を通した学生たちの取り組みはそれらに対応した活動といえるでしょう。そこでは問題をどう解決するかだけではなく、さらに踏み込んで潜在化した問題に気づく能力が必要です。問題発見能力、分析能力、そしてそれを解決していく粘り強さ、さらにはコミュニケーション能力が、これからの学生たちの生きる力を形づくっていくものと確信しています。

**コミュニティ振興学部地域政策学科 教授**
**林 寛一**

## 政策提案に参加した学生の声

フィールドワークが多いところに惹かれ、林先生のゼミに入りました。第4回では、水戸駅北口を活性化したいというプランを提案しました。実際に市役所の様々な部署の方や、現場の商店街の方々にお話を伺ってみると、それぞれ違う角度からの課題が見えてきて、すべてを一度に解決する方法はないことに気づかされました。また、ときには市役所の担当の方と意見の違いについて話し合うこともあり、そうした対話の数々が貴重な経験になりました。

**コミュニティ振興学部地域政策学科 4年**
**西田 光雄**

第7回は、千波湖南側にある逆川緑地をもっと市民の方々に知ってもらおうという地域資源PRの企画でした。皆で現地を見に行き、歩いてみて感じたこと、気づいたことから企画を考えました。グループに分かれ、集めたデータをもとにしたプランで交わしたディベートはとても白熱しました。教室の外での活動を体験してみて、いま水戸市がどんな自然環境にあるのか、普段は意識しない視点から新たな発見が得られました。

**コミュニティ振興学部コミュニティ文化学科 3年**
**三村 慎之介**

## これまでこんなテーマで提案をしてきました。

### 第5回「備前堀を活用したまちづくり」

江戸時代から農業用水として利用されてきた備前堀。知名度アップと利用促進を目指して、地産地消のレストラン、風情ある瓦屋根のバス停、備前堀を起点にした寺社めぐりの散歩コースを提案しました。

### 第6回「市民協働のまちづくり」

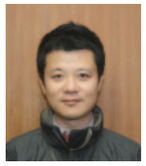
まちづくりの上で大切な役割を果たしているNPO法人の活動に注目。3つの団体への取材をもとに、グラウンドゴルフなどのニュースポーツ大会、県内すべての44自治体の花木を水戸の歩道脇に並べるプロジェクト、若い男性向け料理教室といったアイデアを記事にしました。

### 第8回「水戸芸術館を楽しもう！」

音楽や美術、演劇などの複合施設、水戸芸術館をもっと多くの人に利用してもらうことがテーマ。広場をオブジェや花で彩るプラン、バス停からの案内板の設置、ニューヨークや横浜の事例を参考に、来館者が自由に描ける「らくがきアートボード」と、訪れる人が見て楽しめるような企画を考えました。

## 水戸市から　若者の自由な発想で、わくわくする提案を

これからのまちづくりには、若い世代の考えや取り組みなどを行政に取り入れていくことが求められています。そのためにはまず若者の想いを行政がきちんと把握すること、そして若者にも行政に関心を持ってもらうことが大切です。これまでの8回の提案は学生さんの自由な発想で考えられた内容で、紙面の中でアクセントになっており、楽しんで読める記事になっていると思います。市民の方からも、若者を取り上げたコーナーをたくさん作ってほしいというご要望をいただいています。これからも自由な発想を最大限に引き出し、読んでわくわくするような政策提案をしてほしいと思います。そして常磐大学さんの得意な分野で、力を発揮していただくことを期待しています。



**水戸市広報広聴課 主幹**
**櫻井 学 様**

News

学びのTOPIC
UNIVERSITY
大学

# 「水戸ホーリーホック」の応援イベントを学生が企画、熱い連携が広がっています。

水戸ホーリーホック連携事業

2010年2月に地元のJリーグチーム「水戸ホーリーホック」と常磐大学が連携協力協定を結んだことで、様々な連携事業の可能性が広がっています。その中でいち早く実現したのが、昨年8月29日(日)のホーム試合(対サガン鳥栖戦)にあわせて開催された「常磐大学&水戸ホーリーホックコラボデー」です。このコラボレーションは、学生が発案したイベント企画でスタジアムを盛り上げ、観客動員を図ろうというもの。常磐大学は学校法人全体で協力体制を敷き、国際学部経営学科の学生約50名を中心に、大学、短期大学、高校、智学館、幼稚園の学生・生徒・園児や関係者などが力を合わせ、この一大プロジェクトを成功に導きました。

当日のイベントは、チームカラーの青を使用したオリジナルTシャツとうちわでスタンドを染め上げ、ゴール裏の芝生で応援を楽しむ「フレンドリーブルーシート」、学生が考案した「特別限定メニュー」や「キッズイベント」など、自由な発想を存分に活かした内容。高校のチアリーディングや男子サッカー部も試合を盛り上げ、智学館サッカー部がエキシビジョンマッチを行うなど、スタジアムを訪れた人々を楽しませました。

当日の観客動員数は3946人と、直前の試合までの平均3145人から25%以上も増加し、コラボデーは大成功を収めました。この成果を踏まえ、経営学科では毎年学園祭「ときわ祭」で開催している、学生によるチーム対抗の企画提案イベント「プレゼンバトル」でホーリーホックの集客施策を提案、「どうすれば若者のサポーターを増やせるか」というテーマを設定して学生らしい視点から調査・分析を行い、発展的な提言を行いました。

このような新たな試みを通し、水戸ホーリーホックと常磐大学の連携は今後さらに深まっていくことが期待されています。

コラボデーに合わせ
学生らが考案した応援グッズ。
チームカラーのブルーで統一。

## スタジアムも教室も白熱！

### コラボデー

会場はチームロゴやマスコットの絵を描いたフェイスペイント、オリジナルうちわであふれ、賑やかな雰囲気が応援に一層拍車をかけました。キッズイベントには子どもたち、親子連れの長蛇の列ができ、30分も閉場を延長。普段のスタジアムとは違った熱気に包まれました。

### プレゼンバトル

プレゼンチームからは、選手が居酒屋を突然訪問するサプライズ企画や、デカ盛りグルメの企画が飛び出し会場を湧かせました。ホーリーホック関係者からは「実現できそうな案もあり、とても楽しかった」、「クラブの現状をしっかり把握していた。この輪を様々な方向に広げていってほしい」との感想が寄せられました。

Interview

## サッカーを見る視点が変わりました。

国際学部 経営学科3年 岡田 健志郎

コラボデーでは、経営学科の5つのゼミ生がそれぞれ希望するイベントチームに入り、役割分担して準備に取りかかりました。私が参加した「特別メニュー」開発チームでは、市内の飲食店「しまだ」様と「グルービー」様に5つのメニューを作成いただき、試食会や特設ブログ上での人気投票の結果を参考にしながら、オリジナルのメニューを追求していきました。

当日は販売促進のためにスタッフがサンドイッチマンのスタイルでチラシを配り、来場者の方に積極的にアピール。功を奏し、私が担当した限定各40食の「海鮮焼うどん」と「納豆キムチチャーハン」を、ほぼ完売することができました。

コラボデーの集客力を実感できたことから、その後のプレゼンバトルでは、あらためて現状の課題を調査・分析。スタンドでの応援方法やお店のメニュー、広告宣伝方法を変えることで、若手サポーターの拡大に結びつける提案をまとめました。

これまでは一人のファンとしてサッカーを見に行っていましたが、今回の経験を通して、様々な点に目が向くようになり、チームの経営という視点から見たサッカーに、新しく関心を持ちました。

Interview

## すべてが一から生み出す体験でした。

国際学部 経営学科3年 藤沼 早織

ゼミでは財務・会計分野を研究していたため、新たにマーケティング分野を学びたいと思い、コラボデーに自主参加しました。私はキッズイベント担当となり、準備関係の責任者を任されました。

ミーティングでは毎回その日の目標を決め、ほぼスムーズに進めることができましたが、イベント直前では急な天候の変化による対応に迫られました。現場での想定外の問題をどう解決するか、それを実践したこともよい経験になりました。

プレゼンバトルでは合同ゼミチームに参加し、対抗する文堂ゼミチームとは違う「茨城県の県民性」という新しい視点から問題解決にアプローチ。ホーリーホックの選手を身近な存在にする「突撃飲み会訪問」などの楽しい企画や、県内3大学による合同学園祭を提案しました。細かいところが詰めきれず惜しくも敗北となりましたが、すべてを一から生み出すというこのプロジェクトを通し、ブレーンストーミングや意見交換でアイデアが膨らんでいくプロセスを体験でき新鮮でした。将来、仕事で企画を考えたりプレゼンをするときに、きっとこの経験が活かせると思います。

Interview

## 目標達成のために何をすべきか考え、実践していくことが大切です。

国際学部 経営学科 准教授 文堂 弘之

コラボデーのプロジェクトが本格的に始動したのは、昨年6月9日に開いた学内キックオフイベントからです。この日、学生たちがまとめたイベント案を水戸ホーリーホックの選手を初めマスコミの方々や関係者に発表しました。このときから学生たちの気持ちも引き締まり、やるといった以上は、ぜったい実現しなければという決意が表情にも表れてきました。

準備のプロセスで私たち教員が心がけたのは、なるべく口出しをしないで学生たちの自由な意思決定に任せることです。様々な場面で外部の方々と交渉したり、チームの問題を解決していく力は、自ら実践することを通してしか学べません。時間がかかっても自分たちで意見を出し、気づき、行動していく過程を大切にしました。そして、具体的な目標を立て、それを達成するために何をすべきか、目標と手段をはっきりと考えて進めていくことも徹底させました。このイベント体験を通し、学生たちは実際に社会で求められている意識や感覚がどんなものかを実感し、自分の頭で考える姿勢が身に付いたと思います。

News

学びのTOPIC
JUNIOR COLLEGE
短大

# 実社会と授業をつなぐインターンシップが、学生の成長のステップに。

企業、学生、教員が一体となって進める体験学習

常磐短期大学のキャリア教養学科では、1年次の夏休みを利用して、官公庁や企業などで実務研修を受けるインターンシップ実習を実施しています。受入先には、茨城県庁や東京電力、医療関連企業やNPO法人など幅広い事業所がありますが、学生はそこでの就業プログラムに従って仕事を体験し、様々な発見を得てキャンパスに戻ってきます。

インターンシップのプロセスは、まず、どんな目的で実習に行くのかというオリエンテーションから始まり、学生自らが実習予定の企業研究を行います。その上で個人の目標を設定し、志望理由書を書いて教員の審査を受けます。インターンシップ先が決まった後は、自分が行く企業の基本的な情報を収集するほか、挨拶や自己紹介、電話応対などの基本的なビジネスマナーの指導も受けています。

十分な準備をしていよいよ一週間の実習を務めたあとは、学生全員が報告会を行い、就業体験で得た知識や情報を共有。授業で学んだことが実社会でどのように反映されているのかを検証し、さらに学びを深めています。

また、学外に向けた報告会も実施し、受入企業の方から、感想やアドバイスなどの講評をいただき、振り返りを深めるための大きな助けとなっています。

少人数体制だからこそできるきめ細かな教員の指導により、学生一人ひとりが事前準備からインターンシップ実習、報告までを新たな学びとして経験できるのが常磐短大におけるインターンシップの特徴。表面的な職業理解や適性診断ではなく、就業意識を養うという視点からの指導、また実社会といういわば異文化での体験を通して、体系的に企業活動や職業について考える力を養っています。

## 企業からも評価をいただいた発表会

「インターンシップ」のまとめでもある参加学生合同発表会が12月1日に行われました。大学・短大からそれぞれ3名の代表学生が自身の経験を発表。会場にはインターンシップ参加学生、学長、副学長を初め、指導にあたった先生方の他、受入先企業の方にも出席をいただきました。会場の学生からは「大変だったことや苦労したことは何ですか」や、企業の方からは「企業に対して何か改善点や新たな提案はありますか」などの質問が出され、発表者は丁寧に対応をしました。最後に、「どの学生さんも、インターンシップの前と後では変わったなという印象を持ちます」と企業の方からの感想が述べられました。

プレゼンテーション形式で、大勢の前で堂々と報告をした学生たち。

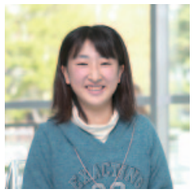
企業の方からもあたたかい講評をいただきました。



Interview

# ホテルの仕事の流れを知り、働く人のプロ意識の高さを実感。

キャリア教養学科1年　大内 理絵



実習先で読み込んだテーブルマナーの本。

私がインターンシップを選択したのは、企業で働くということがどういうことなのかを早い段階で体験してみたかったからです。事前の「マナー講座」では、言葉遣いや立ち居振る舞い、電話応対などを訓練しましたが、実際に実習先の「ホテルレイクビュー水戸」に行ってユニフォームを着てみると、いままでにない緊張感があふれてきました。

5日間を通して様々な部署を体験させていただき、宿泊係ではベッドメイキング、宴会係ではテーブルセッティング、レストラン係では料理を取り分けるサーバーを教えていただきながらお手伝いしました。フロント係や予約係、衣装係の仕事も体験し、受入担当の方の親身なご指導とサポートのもと、ホテル全体と各部署の働き方を知ることができました。

一番印象に残ったのはテーブルマナーで、様々なフォークやナイフ、ワイングラスなどにそれぞれ固有の名前があり、名前にも歴史的な由来があることを知りました。また、他国の方を尊重する国際儀礼があることも初めて知りました。

何より、ホテルで働く人々が常に美しい立ち居振る舞いや笑顔で行動しながらも、素早く無駄のない仕事をしているプロ意識の高さに多くを学びました。また、空間の隅々まで手が行き届き、見えないところで清潔さを保つ努力を繰り返していることにも感心しました。この体験は就職活動に活かすだけではなく、教養として役立つことは積極的に日常生活にも取り入れていきたいと思います。

Interview

# きめ細かい指導とフォローで、学生の学びをサポートしています。

キャリア教養学科 准教授　李 精

発表会では全体の講評を行いました。

短大で行っているインターンシップの特徴は、学生の意欲を重視して希望者を選抜し、教員や学生支援センターが連携して非常にきめ細かい指導とフォローを行っている点です。事前の企業研究では、事業所の所在地や組織図などの基本情報を調べるなどの準備を徹底させています。また、実習期間中は教員が複数人体制で受入企業を訪問し、経営者や担当者の方から実習の状況など、ご意見やご要望をできるかぎり直接伺うという取り組みをしています。

このようなインターンシップの目的は2つあり、1つは学生が身をもって社会を知ることで将来のキャリアを考える礎にすること。もう1つは、職場体験を教室に持ち帰り、それが授業で学んだこととどう関連しているのか、気づきを得ることです。例えばビジネスマナーをただ知ることだけにとどまらず、なぜそのようなマナーができたのか、背景にあるホスピタリティの本質を探るというような意識を持つことで、学生の学びはさらに発展していきます。

さらに、私たち教員にとっても、学生の報告を通してそれぞれの業務現場における最先端の状況や事情を把握し、講義の内容にアップトゥデートに反映していくという意義もあります。

インターンシップは成長のステップですが、通常のアルバイトでは体験できないような企業の領域や業務を見ることを通して、より深い学びを得ることができます。今後は研修内容を企業と共同で検討したり、期間を延長するなど、いっそう充実したものにしていきたいと考えています。

学びのTOPIC
SECONDARY SCHOOL
智学館

# 「スポーツ&ホビー」で感性を磨き、体力をつける。心身のバランスよい成長のために。

スポーツ&ホビーは、毎週水曜日の5・6時限目に、あらかじめ用意されたいくつかの種目の中から、興味のある1つの種目を生徒が選択し、活動する時間です。

1年を3つのシーズンに分け、今回のファイナルシーズンでは運動系・芸術系合わせて17種目が開講されています。どの種目も担当の教員が趣向を凝らした内容になっていて、3月16日の発表会を最終目標に生徒は真剣な表情で創作活動や、研究活動、練習に取り組んでいます。発表の内容や構成を、授業では教わることのない先生や、他学年の生徒と相談しながら決定、実践していくことは生徒たちにとって貴重な経験になっているのではないかと思います。

## ［2010年度に開講した種目からいくつか紹介します］

### Violin

初心者の生徒がほとんどですが、楽器の扱い方から奏法まで個人レッスンを行い、発表会での合奏に向けて頑張っています。

### Badminton

シャトルの打ち上げから始まり、基本的なショットの練習から徐々に打てるショットを増やしていき、最後には試合をしています。

### タスポニー

日本のあるスポーツジムが幅広い層にスポーツを楽しんでもらおうとして創った球技です。テニスに似た競技で、スポンジボールを手で打ちます。

### Karate

空手の基本的な技を学び、最後に1つの型が発表できるように練習しています。また、「強さ」とは何か？ 武道の歴史などについても学習します。

### おかし作り

お正月に余ったおもちでいちご大福、春巻きの皮でアップルパイなど、家族を笑顔にできるような、簡単でおいしいおかしを作っています。

### Sho-Do!!!!

アートとしての書を楽しむ活動を行っています。道具、色、字体などを自分なりに工夫して、体全体で楽しみ表現します。

### 楽器演奏

自分たちの楽器を持ち寄って、楽器演奏の基礎を身に付け、少人数でも合奏のできる曲を探し、アンサンブルを楽しんでいます。

### Craftwork

指編みからレース編みまで手芸の基本を学び、自分でデザインしたミサンガ、マフラー、コサージュなどを手作りしています。

### 超入門CAD

建築土木、電気電子、機械などの分野で使われるコンピューターによる図面作成：CADの操作体験を行っています。使用ソフトはJw_cadです。

### 演劇

自分を表現することが苦手な智学館っ子が、演劇の役作りを通して新しい自分に出会います。今回は、悲劇より難しいといわれる喜劇に挑戦。





## Chigakukan Sports and Hobbies “Speak-Easy” English Conversation

This winter we are working together to do a Sport and Hobby called “Speak-Easy”. In “Speak-Easy” we add to the English that students already have and talk about topics in groups of three or four. We also do activities and learning based games in English.
Our goal is to build students’ confidence and help them to feel comfortable interacting in a second language. Students of any level can participate. All that is required is a desire to communicate. Through topic based conversations students become aware of sentence structures and words they need to express themselves, and are then motivated to discover, learn and speak.

**James Gibbon［Canada］**（写真後列左）
**NET Chigakukan Secondary School**

**Anita Allen［Australia］**（写真後列右）
**NET Chigakukan Secondary School**

私は今、智学館で「Speak-Easy」というスポーツ&ホビーに入っています。英語で会話する時、スムーズに話が進むこともあれば、単語を知らずに会話につまることがあります。また、自分自身では上手に会話ができたと思っても文法のミスが多いこともあります。でも、先生方が会話を聞き、間違った所をメモしておいてくださるので、どう改善すれば良いか一緒に考えることができます。他にも、言えなかった単語をあとから教えてもらうこともできます。このように、言い間違いや、言いたかったことをすぐに教えてもらうことができます。その後、また同じトピックで話す機会が与えられます。そこで先生方からのフィードバックを生かして自信を付けることができます。少しずつですが、私はいろいろな場面において英語で話せるようになってきました。自分の考えを英語で伝えられる楽しさを実感しながら、これからも英語に親しんでいきたいと思います。

**3年次4組　青木 未来**（写真前列中央）

## New Sports にチャレンジ！

直径 85cmの大きなボールの上で弾んで見せると「お～」という歓声が上がりました。しかし「これも一つのスポーツです」という言葉には皆、不思議そうな顔をしました。少し前に健康器具として注目を浴びた「バランスボール」は、多くの生徒が目にしたことのあるものでしたが、サッカーボールやバスケットボールのようにスポーツの道具としては見られないのでしょう。それは、サッカーやバスケットボール、テニスやバレーボールのようにテレビで取り上げられるスポーツこそが彼らにとってのスポーツになっているからです。世界には、もっとたくさんのスポーツがあることを知ってほしい、新しいものを目の前にしたときに抵抗心を持つのではなく、「何だ、何だ？」と興味や関心を持ってほしい、そのきっかけになればと思い「チャレンGYM！」を開講しました。体育の授業とは少し違った視点でスポーツに触れ合い、体を動かす楽しさを感じ、いつかそれぞれの「My Sports」を見つけることにつながればいいな、と思います。

**保健体育科　宮尾 夏姫**

僕の希望したスポーツ & ホビーは、「チャレンGYM！」という体育館で様々なことにトライして、とにかく「体を動かす！」というものです。この「チャレンGYM！」では、新しいことにいろいろトライするのですが、一番印象に残っているのは、バランスボールです。床に脚をつかずにボールに座る、ということだったので、すぐにできると思っていたのですが、これがなかなかできなかったのです。先生にコツを聞いたり、休み時間も練習してみたりと、様々なことをしてボールに座ろうとしました。そして、バランスボールの練習を始めて1か月半、ようやく30秒間床に脚をつかず、ボールに座れるようになりました。その時のうれしさは、とても言葉では言い表しきれません。こういう体験ができたので、僕は、このスポーツ&ホビーを受けてよかったと思います。

**2年次3組　渡辺 和季**

News

学びのTOPIC
KINDERGARTEN
幼稚園

# 自然の恵みの尊さを「お米づくり」で実感。豊かな「生きる力」を育みます。

幼稚園での最新レポート

常磐大学幼稚園では、園児たちが苗から稲を育てる「お米づくり」が毎年行われています。4回目となった今年度は、これまでとは違ってバケツで稲を育てる「バケツ稲」の方法を採り入れました。

そもそもこのお米づくりは、お餅つきの時に藁を見た子どもが「何でここにお米がついてるの?」と疑問を投げかけたことから始まりました。お米がどうやってできるのか、体験を通して学んでほしいという思いが、この活動に込められています。

初めてお米づくりに取り組んだ年、知識も農具もゼロの状態から、まずは地域の農家の方々にアドバイスをいただくことから始まりました。アドバイスをもとに、ポリタンクを使った稲作、はさみやスコップといった普段から身近な道具を活用するなど、子どもたちにも無理なくできる方法を教員たちが創意工夫。最終的には無事に餅米が収穫でき、お餅をついて味わうことができました。

2年目からは園庭に田んぼを造ってのお米づくりを試みました。田おこしの作業もゼロからの出発で教員たちは試行錯誤の連続。子どもたちも「いっしょに田んぼをつくる!」とスコップを握って奮闘。雨の日も寒い日も休まず、水温の管理、穂の観察に真剣に取り組みました。

今年の「バケツ稲」では、一人一つずつのバケツで「自分の稲」を育てるという新しい挑戦を見守ることに。異例の猛暑の中で苦労もひとしおでしたが、今年も無事の収穫を喜びました。

お米づくりを通して、自然の持つ力への畏敬、食べ物の大切さや一つのことを継続していくことの難しさを学んだ子どもたち。お米づくりは、毎年子どもたちの心に、目に見えない大きな実りをもたらしてくれています。

子どもたちの手づくりのかかしがお米を守ってくれました。

## みんなで脱穀にチャレンジ!

### 牛乳パックを使った脱穀なら安全で楽しさいっぱい!

幼稚園のお米づくりでは、子どもたちが安全に作業できるよう、使う道具も工夫しています。例えば、稲刈りにはカマではなく使い慣れたはさみを、脱穀には身近な牛乳パックを活用。作業の安全性と楽しさを同時に引き出しています。

先生が本を見せながら、お米づくりのプロセスを復習。「稲にお米がなったらどうなる?」という先生に、園児たちは「重くて垂れ下がる!」と答えます。

「脱穀」のやり方を先生が実演。全員で「だっこく、がんばるぞ~!」と気勢をあげ、ペアになってさあトライ!

牛乳パックに稲を入れ、蓋を閉めて稲を引っ張ると、お米がパックの中に落ちて溜まっていきます。

二人の息がぴったり合えば、「きれいに取れた!」と笑顔があふれます。うまく取れたときは“いい音”がします。



Report

# お米づくりの様子。

自分のバケツを用意するところから、収穫まで、バケツ稲はこんなふうに育てました。

土と水を入れて、稲を植える準備をします。水は園庭の湧き水を汲んできて使います。

「ねんちょうさん、なにやってるの?」と、年長児の姿に興味津々の年中児。

これからの計画を絵に描いて、「がんばるぞ!」の決意とともに、いよいよお米づくりがスタート。

先生から、田植えの方法についての話を聞き、お米づくりに期待を持ちます。

最初に先生と約束をした通りに、雨の日でも、稲の観察を休まず続けます。

水の量を毎日チェックして、減っていたらすぐに湧き水を汲んできて足すようにします。

みんな頑張って、上手に植えられました!いよいよ稲を育てる毎日が始まります。

植える深さ、間隔など先生から教わりながら、一本一本大切に植えていきます。

お世話になった農家の方へ、感謝のアルバムを手づくりして収穫後に贈りました。

刈り取った稲を束にして、おだがけしておきます。「脱穀の日が楽しみだね!」

いよいよ収穫!稲刈りは皆が日頃使っているはさみを使って行います。

皆のお世話のかいあって、稲はすくすく元気に育ちます。

Interview

# 続けること、協力し合うことで生まれる感謝の気持ち。

常磐大学幼稚園 年長組担任　太田 郁恵(写真上)　楊 貴子(写真中)

お米づくりを始める4月の末頃、私たち教員は毎年最初に、「皆はお米づくりやる?やらない?」と子どもたちに訊ねます。「昨年の年長さんがやったから、今年も」ではなく、子どもたちの「やりたい!」という気持ちを確認することが大切だと考えるからです。「暑くても寒くても、雨が降っても風が吹いても、いつもお世話をしないと枯れてしまうから、皆で1年間頑張れる?」と意志を確認し、約束することが子どもたちの心の支えにもなります。

そして、毎日ただ様子を見に行くだけではなく、稲の状態はどうか、水の温度はどうか、観察することの大切さも教えます。子どもたちにとって稲の存在はとても大きなもので、「1日でも休んじゃだめだよね」といいながら声をかけ合って頑張ってくれました。

世話をする中で、やがて子どもたちの食に対する意識も変わっていきました。それまではご飯を残していた子が、自分たちでつくる大変さを経験し、「今度からご飯残さないで食べるね」など、農家の方への感謝を言葉にするようになりました。

また、保護者の方々も一緒に観察に加わったり、「親子で遊ぶ日」に脱穀を体験したりと、積極的に活動に参加してくださいました。

常磐大学幼稚園は本当に自然に恵まれていて、お米づくりも敷地内の湧き水など、ありのままの環境を活かして行えます。子どもたちの発達にとって、自然が豊かな環境で育つことはとても素晴らしいことです。これからも四季を身近に感じることで、子どもたちの世界を広げていく取り組みができればと考えています。

# Books

## ～教員の著書を紹介します～

■ 人間科学部　教授
伊田 政司
■ 裁判員制度と法心理学
■ 岡田悦典、藤田政博、仲真紀子 編
■ 2009年4月
■ ぎょうせい

本書は裁判員制度の開始に先立ち、その諸問題が法心理学の立場から検討されています。伊田は一般市民の行う量刑判断に関する章を担当しています。

■ 人間科学部 教授
日向野 弘毅
■ 専門訴訟講座②建築訴訟
■ 松本克美、齊藤隆、小久保孝雄 編
■ 2009年4月
■ 民事法研究会

斯界の著名な研究者、東京・大阪地裁の建築集中部に所属した裁判官および弁護士の共著で、弁護士、裁判官、研究者を初め、建築紛争にかかわるすべての人に必携の書です。

■ 人間科学部 准教授
申 紅仙
■ 防災の心理学
－ほんとうの安心とは何か
■ 仁平義明 編
■ 2009年3月
■ 東信堂

自然災害―人はどのような判断・行動をするのか―真の安全・安心とは?どう取り組む?なぜ「自分は大丈夫」と思う?うわさから被害!?防災の心理学的知見を多面的に集約。

■ 国際学部 教授
渡部 茂己
■ 国際人権法
■ 渡部茂己 編著
■ 2009年6月
■ 国際書院

世界中の人の基本的人権を国際的に保護する仕組みが近年急速に整いつつあります。各専門領域で日本を代表する国際人権法研究者が熱意を込めて分かりやすく解説しました。

■ 国際学部 専任講師
小泉 利恵
■ 英語リーディングの科学
－「読めたつもり」の謎を解く
■ 卯城祐司 編著
■ 2009年12月
■ 研究社

英語を読む際、思わぬところで読み間違いをすることがあります。本書は、そのような読み誤りなどをヒントに、英文を読むとはどのような作業かを解説した入門書です。

■ 国際学部 専任講師
小泉 利恵
■ 英語語彙指導の実践アイディア集
－活動例からテスト作成まで
■ 相澤一美、望月正道 編著
■ 2010年9月
■ 大修館書店

英語学習者の語彙を増やすための効果的な指導法を、導入・定着・発展・予習復習・評価などの観点から網羅的にまとめました。指導対象者は小学生から大学生までを含みます。

■ 国際学部 助教
村中 均
■ 国際経済の新構図
雁行型経済発展の視点から
■ 池間誠 編著
■ 2009年6月
■ 文眞堂

先進の雁（日本）から後続の雁へと産業が伝播しアジアの経済発展を展望した雁行形態論からグローバル経済を見通す論文集。村中はマーケティングの視点より新理論を注入。

■ 短期大学 教授
安田 尚道
■ 社会的排除と企業の役割
－母子世帯問題の本質－
■ 安田尚道、塚本成美 著
■ 2009年12月
■ 同友館

格差は母子世帯のような不利な人々を社会的関係から排除し、人間の尊厳と生きる自由を奪います。この問題の本質と企業と政府の役割を生活の質の観点から明らかにしました。

■ 短期大学 教授
宮田 久美子
■ 色彩学入門　色と感性の心理
■ 大山正、齊藤美穂 編
■ 2009年4月
■ 東京大学出版会

色の知覚、表示の基礎知識、色の感性的側面、色彩設計等を系統的に解説した書です。宮田は第6章「色彩調和と配色」で各種色彩調和論、配色の感情効果を説きました。

■ 短期大学 准教授
高橋 眞知子
■ 組織を動かすコミュニケーション力
企業・学校・サークル － あらゆる組織の円滑な運営のために
■ 高橋眞知子 著
■ 2010年10月
■ 実教出版

「人を生かすも殺すも言葉次第」。一人ひとりを輝かせ、組織のやる気と生産性向上、問題解決を目指すコミュニケーションのあり方を組織マネジメントの視点から解明します。

# Voices

## 今回取材した方々からのひとこと

常磐大学では８つの市町と連携協力協定を結び、まちおこしのお手伝いをしています。一昨年からは、耕作放棄地を活用したりんご園の管理運営、商品開発に協力するプロジェクトが始まりました。今後は各地で大学と地域の連携が増えますが、私たちは時代に先駆けてこのような取り組みを進めています。

**常磐大学コミュニティ振興学部 教授　林 寛一**

お米づくりの過程で時には悩んだり、考えたりすることが、皆で共に学び合うきっかけになりました。また、普段、何気なく過ごしてしまいがちですが、自然の恵みのありがたさを改めて感じることができました。自然の素晴らしさやありがたさを様々な活動を通し、子どもたちにも伝えていかなくてはと感じています。

**常磐大学幼稚園 年長組担任　太田 郁恵**

常磐大学高校では、毎年1・2年生を対象に暗唱大会を行い、英語を話すことに慣れるようにしています。また、生徒には電子辞書ではなく、例文や派生語が覚えやすい紙辞書の使用を推奨しています。学校生活の中で自然に会話力や単語力が身に付くようにしている点も、常磐大学高等学校の英語教育の特色です。

**常磐大学高等学校 英語担当　鈴木 レイ子**

常磐交換留学制度では、奨学金として学費・生活費・渡航費用の全額が免除されます。この制度が利用できる成績を目指して勉強しました。最初は水準に遠い成績でしたが、EC活動などを通してスコアを上げ、アメリカ留学を実現できました。国際交流に力を入れる常磐大学らしいサポートに感謝しています。

**常磐大学国際学部英米語学科 4年　戸崎 愛美**





# キャンパスから未来へ

卒業する学生からのメッセージ

大学での学びが、
本当に自分の力として感じられるのは社会に出てからです。
選んだ道、進む世界は違っても、
得た知識や経験はそれぞれの人生の礎になるもの。
希望を胸に、大きな一歩を踏み出そうとしている
卒業前の学生にインタビューしました。

コミュニティ振興学部コミュニティ文化学科４年　藤井 知佳

## 人のあたたかさに支えられた４年間。

入学前、まだ進むべき分野に迷っていたとき、常磐大学のオープンキャンパスに参加しました。そこで「コミュニティ振興学部」という、他にない学部に出会い、とても新鮮さを感じ、面白いことに挑戦できそうだなと思い、進学を決めました。先生方を初め、大学全体が明るくあたたかい雰囲気だったことも、理由のひとつです。そして出会った坂本登先生から学んだことが、私の４年間のなかで大きな意味を持っています。先生のゼミのテーマは「生涯学習」。学びたいことを学ぶのが生涯学習ということ、勉強は学校を卒業したら終わるのではなく、そこからがスタートということが、私の人生観に影響を与えてくれました。

先生はその「学びたいことを学ぶ」という考えで、卒業論文のテーマも自由に決めさせてくださいました。私が選んだテーマは「商品パッケージと色彩」について。３年生のとき、就職対策にと受けた色彩検定試験の勉強で疑問に感じたことを取り上げました。アルバイト先のお店などにご協力いただいて、５００点もの商品パッケージの色彩を調査しました。作業は大変でしたが、先生からお褒めいただいたりアドバイスをたくさんいただいたりしたことが支えになりました。

大学生活でもう一つ、忘れられないのは、就職活動の際、先生や職員の方、友人たちが心から親身になって応援してくださったことです。履歴書の書き方や面接のトレーニングまで助けていただき、精神的な支えにもなってくださいました。そのおかげで、郵便局株式会社から無事内定をいただきました。アルバイト経験を活かして人と接する仕事をしたいと考えていたので、第一志望が叶ってとても嬉しいです。

入学前の印象と同じく、明るくあたたかい人々に出会えた常磐の４年間でした。社会人になっても人との出会いを大切にしていきたいと思います。

坂本ゼミの皆と

３年生で取得した色彩検定２級が卒論テーマのきっかけに